

## 同窓生シリーズ

第88回

18回生

田口 久美子

Kumiko Taguchi

ジュンク堂書店池袋本店副店長



略歴／1947年生まれ。

新宿高校から東京外国語大学ドイツ語科卒業  
 キディランドを経て西武百貨店書籍部（のちのリプロ）入社。  
 現在ジュンク堂書店池袋本店副店長。  
 著書に『書店風雲録』（本の雑誌社・2003年）（ちくま文庫・2007年）  
 『書店繁盛記』（ポプラ社・2006年）（ポプラ文庫・2010年）  
 『書店不屈宣言』（筑摩書房・2014年）がある。

高校時代の友人と私  
うしろの席に用心

入澤美時という男子がいた。三年生の時まうしろの席に座っていた。私のほの暗い高校生活で唯一くつきりと印象に残っているのが彼だ。

入澤は私のうしろの席で、まず授業が始まる前に、昨日までどんな授業があったかを根掘り葉掘り聞く、ノートをみせろ、と平然と言う。授業が始まればうしろから指でつつき「おい、今アイツは何を言っているんだ」とあたりをはばからない。私はいいやや振り返ってはこそこそと説明するのだが、当然教師の爆弾が落ちる「おい、その二人うるさい」。入澤はその頃はまだ珍しかった「左翼青年」であった。数年後には跋扈する「全共闘」の先駆け、と言った方がいいのかもしれない。要するに「札付きの政治不良」だったのだ。かなり経ってから知ったのだが「反戦高協（中核派高校生組織）」のメンバーで佐世保の原潜寄港阻止闘争に取り組んでいた、そっだ。「そっち」の活動の合間に授業に出ていた。

もし逮捕でもされたら？ 学校側もさぞかしヒヤヒヤものだったろう。

私は入澤の「自由」がうらやましかったのだ。容姿にも恵まれず、性格もキツく、平凡な会社員の家に生まれて、誉められる時は「お勉強ができて、将来が楽しみね」と皮肉交じりであった。その成績だって新宿高校では中位の平凡な女子。新宿は「かつての旧制六高」の残り香が漂い、日本のエリートを育てる場としてあった。つまり東大への進学数を競う高校であったのだ。女子は一クラス五五人中一五人ほどで、男女共学の言いわけのような存在であった。そんな環境の中で、とにかく大学に入って仕事をかむツールを得たい、と受験勉強に励むしかない暗い日々であった。男女雇用機会均等法の施行は一九八六年であり、女性はトップにはなれない、でもトップの妻にはなれる、という「金言」が女子の間で違和感もなく流布される時代であったのだ。別にトップにならなくてもいい、結婚してステップアップなんて考えてもいない、少なくとも誇りを持って一生続けられる仕事をした、とひたすら私は思っていた。そしてやっと入った国立大学で私は知る、大卒の女子には高卒よりもっと就職の門は狭いと。しかしそれはまた別の話だ。

## 人生は「高校時代」が決める

出席日数の不足を乗り越え、入澤はなんとか卒業した。ほとんどの教師が反対するなか、担任と美術の教師がとりなしてくれて、感謝している、と後で述懐していた。感謝？ 既成権力に抗うはずの入澤も卒業はしたかったのだ、と私は思ったものだ。本来ならこの卒業時点で入澤との因縁は切れたはずなのに、交流はとぎれとぎれに彼が亡くなるまで続いた。

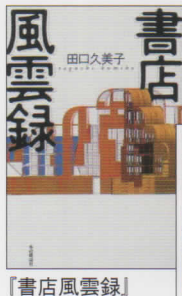
入澤の高校卒業後の就職先が私の家のすぐ近くの出版社だったこと、二十代半ばで結婚した相手と私が仲良くなっ

て、新しいかたちの付き合いが続いたからであった。ポツリポツリと入澤の輪郭を知るようになる。

入澤家は医者の家系であった。だが小さいころ亡くした父は大蔵省の官僚で、将来を嘱望されていたらしい。歳の離れた兄弟たちはこの頃すでに社会人で、医師の長男を筆頭にエリートコースを歩んでいた。「越境した中学から新宿に入った。ここで一番になるはずだったのに」とふともらしたことがあった。お仕着せの勉強が合わなかったわけだ、それで「反戦高協」ね。でも何故その中核派から足を洗ったの？ 全共闘の「時の人」になったかもしれないじゃない。という私の揶揄に反論はなかった。私は推測する、誇り高き高校生であった彼は組織の下っ端に我慢できなかった、組織の上に立つか、ひとりで立つか、しか彼の生き方はなかったのだろう。

高校は卒業したが大学にはいかず（いけず？）美術系の出版社に入った。入社してすぐに組合運動を始める、さんざん会社をひっかきまわした挙句に一〇年ほどして退社、独立して出版業を営むかたわら長良川や白神山地などの環境保全運動に奔走。ここで彼の組織力がいかに発揮された。自分の居場所を見つけたわけだ。

二〇〇九年、医者の家系にもかかわらず西洋医療を拒否し食道癌で逝去。（戦後最大の思想家）吉本隆明の後継者は僕だ、と公言していたが、吉本さんより先に逝ってしまった。私は高校時代からのたった一人の友人を六一歳で失った。遺した膨大な書物は図書館に寄贈された。亡くなった年の同窓会で、しばし入澤の話で盛り上がった。出席していたほとんどの男子が名のある企業や官庁に勤務もしくは退職者であったが、入澤の生き方に「微妙な羨望」を抱いていたことに私は密かに驚いた。



『書店風雲録』



『書店繁盛記』



『書店不屈宣言』



入澤と一友達4人の香港旅行（1980年代初め）